

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
プロジェクト研究（共同プロジェクト研究）
2015年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職		氏 名				
	文学部・教授		河野 哲也 印				
研究課題	死生観と道徳性の生涯発達における対話の効果についての研究						
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2016年3月現在	所属研究機関・部局・職		氏 名				
	上智大学・文学部・教授		寺田 俊郎				
	東京工業高等専門学校・一般教育課・准教授		村瀬 智之				
研究期間	2015年度 ～ 2016年度						
研究経費※	2015年度		2016年度		年度		総計
(上段: 支出金額)	3,000,000	円		円		円	3,000,000
(下段: 採択金額)	3,000,000		3,000,000				6,000,000

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、新学術領域研究（研究領域提案型）の「生涯学の創出—誕生から死までのこころとからだの変遷」研究の準備的位置づけを持ち、とくに「対話」という双方向的で、創発的、集団的な行為に着目し、その生涯発達への寄与を明らかにする。70年代以降に発達し世界的に広まっている「哲学対話」は、相互の考えや行動に大きな変化をもたらすことで注目を集めている。そこで以下の三つの場所・場面で哲学対話を実際に実践し、対話を通して参加者の死生観と道徳性にどのような変容が生じるのかを心理学的・教育学的に調査し、思考力と反省力を深める対話の方法論について開発する。(1) 学校（小学校～大学）での死生観と道徳性の発達、(2) 職場における哲学対話を通じた倫理意識と人生観の変容、(3) 地域での哲学対話を通じた死生観と道徳性の発達

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

〔哲学対話〕 〔生涯発達〕 〔道徳性〕

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

70年代以降、実践的哲学として発達してきた「哲学対話 Philosophical Dialogue」は、参加者が自由な立場で人生、倫理、価値、社会等について真摯に語り合い、相互の考えや行動に大きな変化をもたらすことで注目を集めている。哲学対話がどのような形で自己意識に変化をもたらすかを明らかにするとともに、対話を自己教育的な方法論として捉え、その方法を進歩発展させることは本研究の目的である。ただし本研究は2年間限りであり、以上の目的を遂行するための以下の準備的・試行的な段階が中心になる。① 哲学対話の方法論を示したインストラクション教材(ビデオ、PP、DVD資料)を作成する。同時に、国内外の研究者を招聘してワークショップを開催して指導・教育する。② 反省的・批判的思考の発達測定尺度、テストの改良を行う。③ 発達の効果を評価するためのインタビュー項目、アンケートの質問項目などの作成。④ 新しい現場の開拓: 対話実践の現場を広げ、さまざまな場所で多様な人々に対話に参加してもらうために実践の現場を広げる。

まず、①であるが、子どものための哲学対話のビデオを作成した。立教大学内で許可を取り、応募してきた子ども7名とその保護者に協力を頂き、哲学対話の方法や注意事項を知らせたインストラクション・ビデオをビデオ制作会社に依頼して制作した。(プライバシーには十分に注意し、参加者全員から承諾書を取り、ビデオ完成後も視聴してもらい教育的な目的のもと公開の許可を得た。) 今後の実践の場を増やし、教育方法の開発に資するように学校や大学、NPOを中心にこのビデオを送った。限定的にウェブ上でも公開している。やり方紹介ビデオ(URL: <https://youtu.be/TiHGrPFwEJ8>)、ショートバージョン(https://www.youtube.com/watch?v=0b222t_8P34&feature=player_embedded)。関東学院小学校、お茶の水女子大学附属小学校、豊島岡女子学園では、インストラクション・ビデオ資料として利用されており、今後、さまざま対話の現場で最初の導入、説明のときに使う予定である。哲学プラクティス連絡会のウェブ上でも紹介している。

(<http://www.city.edogawa.tokyo.jp/miraikan/>)

次に、国内外の研究者を招聘してのワークショップであるが、2016年3月に慶尚大学校名誉教授であり、韓国を中心にアジアで哲学教育や哲学対話を長年実践してきた東アジアにおける哲学プラクティスの第一人者であるJinwhan Park教授を招聘し、講演会、ワークショップ、ミーティングを行った。研究協力者の寺田俊郎氏(上智大学)、村瀬智之(東京工業高等専門学校)と共に、3月17日「専門家の判断形成について: 医療現場における哲学対話」(立教大学池袋キャンパス)、3月18日「中高大学生向け「子どもの哲学」ワークショップ」(高千穂大学)、3月19日「韓国・アジアにおける子どもの哲学」(立教大学池袋キャンパス)、3月20日研究会と共同研究打ち合わせ(上智大学)を行った。17～19日の講演・ワークショップにはそれぞれ20～40名の参加者(学生(本学含む)、研究者、学校教員、一般、高校生)が集まり、好評を得た。とくに17日の医療現場における哲学対話の方法についてのワークショップは、本プロジェクト「(2) 職場における哲学対話を通じた倫理意識と人生観の変容」のための貴重な示唆となった。

③ 発達の効果を評価するためのインタビュー項目、アンケートの質問項目などの作成についてであるが、江戸川区子ども未来館(<http://www.city.edogawa.tokyo.jp/miraikan/>)と提携し、2016年度「子どもアカデミー・ゼミ」として哲学対話を一年間(月一度)開催することになり、そのための教材、教育用資料、教育手順、効果測定方法などを江戸川区文化教養部健全育成課の松井朋子氏と共同で開発中であり、2016年度4月の開催とともにそれらの教材と教育法、効果測定法を使用し、子どもとの継続的な関わりの中でそれらの改良と発展を期している。子ども哲学の効果測定法については、宮田舞氏、土屋陽介氏と心理学的・教育的な共著論文を準備中であり、今後、国際哲学プラクティス学会(ICPP)あるいは、国際子どもの哲学学会(ICPIC)で発表する予定である。また、子どもの哲学の評価方法(成績のつけ方など)については、関東学院小学校(3月23日)、および、お茶の水女子大学附属小学校(3月24日)で講演会を行い、小学校教員に対して講演とディスカッションを行った。

研究【経過・成果】の概要 つづき

④新しい現場の開拓については、今年度は大きな成果があった。

まず、哲学対話の世界は近年、大きく飛躍しているにもかかわらず、実践や研究を報告し、実践家や研究者間で情報交換をしあう場がなかった。そこで、報告者は日本の哲学プラクティスに関わる人たちのための連絡会、「哲学プラクティス連絡会」を設立し、第一回大会を10月18日に本学で開催した。中岡成文氏(元・大阪大・教授)、梶谷真司氏(東京大学共生のための国際哲学研究センターセンター長)、寺田俊郎氏(上智大・教授)などのような大学教員だけではなく、溜剛氏(開智中学・高等学校校長)、金澤正治氏(小学校教諭)、中川雅道氏(中学校教諭)、吉村直記氏(保育園園長)のような中等初等学校教諭や保育園園長、松川絵里氏、堀越睦氏、川辺洋平氏のような哲学カフェNPOの実践家を招聘し、講演とワークショップを行った。この連絡会は、研究者ばかりが集まる学会ではなく、哲学プラクティスに関心を持つすべての人(子どもを含む)が集える場である。来場者数は当初の予測を超える250名ほどとなる盛会であった。ホームページを開設した(<http://philosophicalpractice.jp>)。日本の哲学プラクティスは互いに連絡を取り合えるプラットフォームができたことによって、より発展を期待できるだろう。「哲学プラクティス連絡会」設立は本SFRにおける最大の成果である。

第二に、学校を現場とした哲学対話、すなわち「子ども哲学」としては、二つの重要な実践を行った。ひとつは、文部科学省のスーパー・グローバル・ハイスクールの一環としての「OECD 地方創成イノベーションスクール 2030・広島クラスター」第1回全体スクール(<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/global-manabinohenkaku-actionplan/global-oecd.html>)における哲学対話の実践である。広島県教育委員会と連携し、国立江田島青少年交流の家(広島県江田島市)に本学の院生・学生、および他大学院生の計16名で出張し、「地方創生」をテーマとする2日間のワークショップで、総勢約100名(広島県内の高校生60名、教員20名、広島大学他ボランティア20名)を対象とした哲学対話の実践を行った。その成果は、むしろ広島県教育委員会HPを見られたい(<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/188986.pdf>)。この広島県教育委員会のSGHプロジェクトへの協力は、子ども哲学であると同時に、地域おこし(地方再生)事業としての位置付けもあるため、「(3) 地域での哲学対話を通じた生涯発達」にも関わっている。また、2016年1月26日には、広島県立広島高校SGHプロジェクトの一環として「持続可能な社会研究ワークショップ」と題した高校一学年全員を対象とした哲学対話の実践を行った。

第二に、沖縄県での「(3) 地域での哲学対話」の実践である。2016年1月30日ジュンク堂那覇店での哲学カフェ(テーマ「平和とは一体何か」)、1月31日琉球新報社における子ども・保護者哲学カフェ(テーマ「なぜ勉強しなきゃいけないの」、2月1日宮古島、宮古高校における倫理社会クラスでの哲学対話授業を行った。本学院生・学生、他大学院生を含む計7名で、沖縄地域における問題(平和・基地問題、学力格差問題、就職問題)を扱った哲学対話を行った。本格的な哲学カフェは「沖縄初」とのことであった。琉球新報子ども新聞(2016年2月)にその様子が掲載された。

また、寺田俊郎氏と研究代表者で、フェリックス・パートナーズ株式会社から協力を得ながら、企業内の哲学対話のプログラム開発に取り組んでいる。企業倫理をテーマとした哲学対話、リーダーシップやライフ・ワーク・バランス、転職などの企業で仕事をする中でぶつかる人生上の問題をテーマとした哲学対話、あるいは、批判的思考法を育てるための哲学対話の実践を繰り返し替えしながら、企業内で倫理意識を育み、思考力や反省力、コミュニケーション能力を向上させ、あるいは、自分の仕事観と人生観を発展させるためのプログラムの開発に取り組んでいる。とくに、「②反省的・批判的思考の発達測定尺度、テストの改良」に取り組み始め、研究協力者と議論を重ねたが、この部分については十分に進展させることができなかった。研究協力者に参加してもらいながら、2016年度は、この②の課題にも取り組む予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

② 図 書 :

1. KONO, Tetsuya "Philosophical Practice in Japan" *Practicing Philosophy*. Fatić, Aleksandar and Amir, Lydia (Eds.) Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, 2016, pp.182-202.
2. 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・神戸和佳子『子どもの哲学：考えることをはじめた君へ』毎日新聞出版，2015年12月．
3. マシュー・リップマン他『子どものための哲学授業』河野哲也・清水将吾監訳，河出書房新社，2015年4月．

③ シンポジウム・公開講演会 :

4. 河野哲也「哲学プラクティス連絡会設立趣旨」『哲学プラクティス連絡会第1回大会』2015年10月18日，於：立教大学池袋キャンパス．
5. 河野哲也「レポート課題における「問い」の重要性」公開研究会「レポート課題において何を問うべきか？ーオリジナリティが求められる論題とその評価」，2015年12月5日，於：京都光華女子大学．
6. 河野哲也「哲学と人文社会学の明るい未来：これは皮肉ではない」公開シンポジウム，日本学術会議哲学委員会主催 哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合共済「哲学なしで生きられるのか」2015年12月12日，於：日本学術会議講堂．

④ その他 :

7. 河野哲也「子どもの哲学はどういう教育か？」『UTCP Libro Booklet 11 Philosophy for everyone 2013-2015』P4E研究会編，pp.181-183．